

「近代文学における障害者像

—正宗白鳥『五月幟』を読む

埼玉県鳩ヶ谷支部 小林幸雄

はじめに 自己紹介

1948年生 東京都立川市錦町・北区十条・目黒区上目黒・香川県高松市
・東京都新宿区西大久保・埼玉県蕨市・東京北区豊島五丁目・埼玉県鳩ヶ谷市(川口市に合併)

2009年3月鳩ヶ谷市立鳩ヶ谷中学校 退職(再任用1年終了)

その後、鳩ヶ谷中学校特別支援学級の「太鼓」の授業の指導者(学校応援員?)として今まで
毎週1時間

地域サークルHDS(鳩ヶ谷中学校複式学級同窓会スポーツサークル)に参加
毎月日曜日1から2回 卓球活動

・・・地域において、障害者と共に生活—文化・スポーツで

あんとう舎(チエーホフ劇を公演する素人劇団) 同人 2009年チエーホフ作「かもめ」出演
劇団「キンダースペース」シニアワークショップ(1年)「パセリの気持ち」公演に参加
続いてワーカユニット参加(現在3年目)以下の公演に参加

2010年吉田小夏作「雨と猫といくつかの嘘」

2011年大岡昇平作「清姫」・北村雄大作「絶景アイランド」

2012年黒島博治作「前哨」・菊池寛作「恩讐の彼方に」

・・・戯曲・小説を身体的・言語的表現活動に具体化する中で、文学的世界に遊ぶ

1、歴史における障がい者…障がい者教育の一貫として歴史学習の勧め(清水寛『障害児教育とはなにか』)

その場合、歴史的に捉えることと現代的な障がい者認識(荒川智・茂木俊彦)との関わりを意識し、後者を研ぎ澄ましつつ、歴史を掘り起こす。

・・・現代的な障害者認識と障害児教育論

例えば、茂木俊彦著『障害児教育を考える』(岩波新書)

・・・序章=社会参加する障がい者たち

- ・重度重複障害者も知的障害者も
- ・障がい者権利条約の時代
- ・特殊教育から特別支援教育へ
- ・特別支援教育を発展させるには

2、近代文学における障害者像—正宗白鳥「五月幟」との偶然の出会い。

①偶然いや必然。演劇から近代文学へ という流れの中で。

また、加藤周一の仕事の中で、文学史を読み進む中で。

2012年7月31日

② 正宗白鳥への注目

加藤周一の『日本文学史序説』の場合

「1868年の世代」として

明治維新後の世代・異質の教育(少年時の漢学とその後の英語、しかる後大学)・
環境(自由民権と国権伸長論との間で①文明開化②産業資本の形成へと社会変化)

「西洋文化との広範で組織的な接触」「伝統的な教養の深さ」「社会全体への関心」
5つの類型(1)伝統主義—幸田露伴・尾崎紅葉・泉鏡花

(2)文化的伝統の対象化—岡倉天心・鈴木大拙・柳田國男・正岡子規・伊藤左千夫

(3)文化的対立の創造力への転化—森鷗外・夏目漱石・西田幾太郎
(4)キリスト教と社会主義—新島襄・植村正久・内村鑑三・徳富蘆花・北村透谷・幸徳秋水・河上肇

(5)上京組の「自然主義」—二葉亭四迷・坪内逍遙・田山花袋から
正宗白鳥

(5)の小説観 小説は人生の「真相」と「無技巧」の散文から成り、「真相」とは当人の日常生活の経験のそのままの記録である。

そして彼らの経験の内容は2つ

- ①故郷の大家族のなかでの生活・・・・・正宗白鳥「五月幟」
- ②文士としての東京での生活

日本自然主義とノラたちのナチュラリズムとの違い

- ①生物学的方法など科学との関わりの有無
- ②広大な社会的視野か、作者の身近な事か
- ③市民社会を対象とするか、市民社会未成熟による紛争か
- ④自然科学の対象としての「自然」か「あるがまま」「無技巧」「無作為」の自然、天地自然、山水、都会的ならざる「田園」か

例外 島崎藤村(「夜明け前」)と正宗白鳥(キリスト教への態度と3つの問題)

- ①死の恐怖 ②「人間の真実」③「西洋」への態度

中村光夫の『日本の近代文学』・小田切秀雄『日本現代文学史(上)』

小林秀雄『正宗白鳥』・杉浦明平・勝本清一郎など

③ 近代文学における社会認識(社会問題認識)との関連で考える

島崎藤村『破戒』における部落問題

軍隊・戦争・軍国主義批判の系譜(黒島博治の反戦文学史など)

3、正宗白鳥の年譜

1879(明治12)年 岡山県和気郡 穂浪村(現・備前町穂浪)に正宗浦二の長男として生。

正宗家 2百余年続いた旧家、屋号は亀屋。弟妹9人。2人は夭折。

1896(明治29)年 上京して 東京専門学校(早稲田大学の前身)の英語専修科に入学。

市ヶ谷の基督教講義所で植村正久の説教を聴く。内村鑑三の講演を聴く。

翌年洗礼をうける。1901(明治34)年キリスト教を棄てた。

1901(明治34)年 東京専門学校文学科卒業。母校の出版部に就職。編集にあたる。

1903(明治36)年 読売新聞社に入社。

1904(明治37)年 後藤田外に勧められ、はじめて小説「寂寞」を「新小説」に発表。

1908(明治41)年 「玉突屋」「何處へ」「五月幟」を発表。第2短篇集『何處へ』刊行。

1962（昭和37）年 「わが終末期」発表。講演「文学生活の六十年」。「白鳥百話」連載。
10月28日永眠。享年84歳。洗礼をうけ基督教会で葬儀。

4、正宗白鳥の『五月幟』(別紙) を読む

瀬戸吉松の一家 (3人家族・父は早死)		
		村
1 母=巫女 息子=吉松=画工 五月幟の揮毫で多忙 吉松の竹への思い (女房になるか)	妹=初野 吉松のボヤキ (冷やかされ あほう 早う死腐れ 狂人 物入り多く 嫁がとれない) への母の反撃	穂浪村=3百戸 漁業と農業 明後日は旧暦5月の節句 大漁祝いの集会 肥桶・水汲女・お竹
2 吉松の画工への道 村での評価 若い漁夫による威嚇 (竹を娶ることへの牽制) がこたえる (震えた) 吉松	白痴の妹が年中村の子供の玩具になるのが恥ずかしい吉松	若い漁夫による冷かしと 警告 源
3 吉松 漁夫と性が合わない 錢のはなし 沈む吉松 気分が鬱々 家が暗い、不意に起 あがって声する方へ、たたずむ 飛び込まない 羨ましく妬ましい	初野のことば= お母、家は暗いなあ、兄よ、 お宮は賑やかじやぞ 兄はお宮に行かんのか 兄よ、沖には海坊主が・・・	神前に数十の漁夫 怒鳴 っては呑み、呑んでは怒 鳴る 賭博 女
4 雨 婆さん (母) は生靈退治 吉松 昨日の出来事 お竹から ギヨシとして にやり 不安新 村が恐い 母の怒り (源へ) 吉松への悪態	初野 外出 真っ赤な顔して裸…酒を飲ま され踊されている	お高姉の家 生靈退治の 依頼 お竹から吉松へ 米 源 亀 酒 初野に 酒と踊り 母の鈴をとり、囁レバカ 踊り
5 吉松 不甲斐なさ 夢の中の呪い (源へ) 死 を願い 恐ろしくなる 5月5日 魚買いにいく 五月幟に得意になる 源と会う	初野のことば= 夢をみて「兄よ、来てくれ、 恐いがな、恐いがな」	源 「吉公、汝も壯健 か、久しぶりじゃのう 笑顔 沙魚を 汝にも分けてや ろう さあその鍋をこつ ちへ出せ」

障がい者を 家族の中で 村の中で捉えている

2 差別の存在とその解決の展望

3 障がい者の主体的な側面の描写

5、近代文学における障がい者像
同時代の文学の中で

国木田独歩 「春の鳥」1904年『女学世界』に発表 (34歳)

私は九州の城下町で下宿 その下宿の主人の妹一家3人 姉 (おしげ) と弟 (六蔵) はともに「白痴」。下宿の主人、隠す→相談 亡くなった大酒家の父。学校で何一つ学び得ずいら教師が骨を折っても無駄、到底他の生徒と一緒に教えることは出来ず、徒に他の腕白生徒の嘲弄の道具になるばかり 退学した。母親も余程抜けている人で、二人の子どもの白痴の原因は、父の大酒にもよるでしゅが、母の遺伝にも因ることは私は直ぐ看破しました。…不具の中にもこれほど哀れなものはない…白痴となると、心の嘔、聾、盲ですから殆ど禽獸に類して居る…なお哀れです…母の願い…白痴を心配すること普通の親と変わらない…母親もまた白痴に近いだけ、私は益々憐れを催ふしました。思わず私は貴い泣きをした位でした。…六歳の教育…数の観念が欠けている…腕白…泣く…歌…鳥が好き…何でも鳥…不慮の災難…石垣の下に死骸が墜っていた…春の鳥

その後の文学

宮澤賢二 「虔十公園林」…・虔十はいつも縄の帶をしめて、わらって森の中や畑の間をゆっくり歩いていました。…子供らが虔十をばかにして笑う…「お母、おらさ杉苗七百本、買って呉ろ。」「杉苗七百本、どこさ植えらい。」「家のうしろの野原さ。」「買ってやれ、買ってやれ。虔十あいままでなにひとつだって頼んだごとがないがったもの。買ってやれ。」…

…・・・・・ああ全くだれがかしこく、だれが賢くないかわかりません。…・・・この公園林の杉の黒い立派な緑、さわやかなにおい、夏のすずしい陰、月光色の芝ふがこれから何千人の人たちに、ほんとうのさいわいがなんだかを教えるか教えられませんでした。…・・・

大江健三郎…

『かつてあじわったことのない深甚な恐怖感が鳥 (バード) をとらえた』大江健三郎

(新潮文庫『個人的な体験』のあとがき 1981年1月より)

頭部に異常のある新生児として生まれてきた息子に触発されて、僕はこの『個人的な体験』(1964年) にはじまり、いくつもの作品を書いてきた。…・・・

『空の怪物アグイー』1964年

当の新生児を闇にほうむったために、父親たる自分の生存の意味をも見うしなった男を描く
『万延元年のフットボール』1967年

手術後人間の子供らしい反応を示さなくなってしまった子供を手許において世話をすることをしない両親の頽廃を描く
『洪水はわが魂に及び』1973年

新生児が、鳥の声を数多く聴きわける子供として育ち、かれと隠れ住む父親の支えをなしている
『ピンチランナー調書』1976年

知恵遅れの子供と父親の関係が逆転して、子供は壮年に、父親はハイ・ティーンと「転換」する

青春のしめくくりの時期から、中年(壮年)のしめくくりを目前に見すえねばならぬ時期まで、ついに作家としての僕は、頭に負傷をおつて生まれてき、知恵遅れをはじめとする多様な障害をになって成長してゆく息子との共生を、あるいは契機にし、あるいはそのまま主題として、仕事をしてきたのである。そして僕の作家としての生涯を、そのように決定したといってよい出来事について、まずははじめに青春の小説としてあるものが(それも書き手の意識としては、青春の表現に縁遠い、苦渋の思いとともに書いたものが)、『個人的な体験』なのであった。

で使っている。で、道具には不平を抱いているが、好きな仕事ではあり、身体第一金が取れるのだから、自然に勧めもついて、身体の悪いのも我慢して、筆を運ばせた。家は二重だが、ただ頭で区切つてあるのみで、樹木も障子もない。上等の室には床板の上に薄縁を敷き詰め、次の室には座間田代りに一枚の席を敷いてある。絵布の柄は蘭片袖をまくり上げ、肥った胸を露わして白を拂いでいる。眉端をし通して、朝から拂つて、まだ一升足らずの粉が抜けきらぬ。

「吉よ、汝やまだ書いてしまわんか」と、婆さんは附木で粉をかき寄せた張籠に移つして、「お少しへ書いてしまわあ、お母はまだ拂いてしまわんのか」

「お母も、もう一握りでええんじゃがの、汝お腹が減つたら、お層飯にしようか、太陽機もそろそろ隣りの牛小屋へ当りだした」

「そうちな、もう正午過か、そないになるたあ思わなんだ」

「じりやお茶でも漬そら」と、婆さんは片手で膝を压え、「うんとしち」と伸び上

り、山田の多い庭へ下りて、柴を一攫き折つて茶釜の下へ投げこみ、附木で火を点けた。黒烟が滴を巻いて茶布の上を這い、低い軒下へ流れでる。吉松は青い頬を頼め、勢のない咳を出した。目を細くして戸外を見た。門口には五月雨の用意に柴木片を堆高く積んである。空煙冠りして腰桶組つた男が、腰を振つて通つている。二三人首を抱き合ひ、得意氣に巻煙草を吹き、グラグラ笑を掛けに行く者もある。尻端折り繕事腰を穿いた水汲女が小さい桶を荷つて一人三人続いて通つた。井戸水は塩氣があり、山廬の泉のみが一村の飲料となるので、金と節句には泉が乾れると言うが、きゅうに家族の植えたこのごろ、女房や娘は水汲が一日の大役なのだ。

吉松はその水汲の一人の後姿を見て(お竹)やないかと思った。顔を正面せず、すすぐと行つてしまつたが、その真紅の襟、眼らかな白い脛、どうも彼女らしい。で、彼は少し伸び上つて、つたり突つたこれを書いてしまつたら彼女に遇える。隣の屋では節句を当てこんで、岡山からうんと小間物を仕入れてきたそだから、彼女にかじりでも桶でも買ってやる。目頭で呼びだし渠の側の轍へ行くのだ。

五月 檜のぼり

穂浪村は人家三百戸」と、小学の教師は二十年も前から見習に教えていた。この三百戸の八九分は漁業農業、あるいは漁業兼業で生活を立てている。母は巫女、島子は画工。村に不似合な最も風景の仕事をしている。で、海が荒れて不漁が續いたり、暴風雨や虫害で麦や稻の充実が悪いと、商人も大工も石屋も瓦屋もある。今は僧侶神主、皆その影響を受けるのだが、ここに吉松一家はひどい。しかし今は漁がよかつた。鰯も捕れた、蟹も捕れた。しかし今度は漁がよかつた。洋銀の簪やら派手な手拭やら、土産物をどうさり賣にこみ、なかなか魚籠には西手で柳いきれねほどの銀貨や銅貨を残して帰ってきた。明後日は

日暦五月の節句であれば、瀬戸内海へ出發に行つてよく不漁でない限りは、久しづりに陸の塙^{アキ}へ来る舟も、飯を食いに帰り、浜辺には珍しく百艘近くの舟船が並んでいる。そして吉松は諸方から櫓の揮毫を頼まれて、近年になく多忙である。

彼は日限に迫られ、五六日戸外へ出で、夜も行きの側で書いていたが、いよいよ今一つ描き終れるのだが、図題は穂浪の清正で、はな形だけできあがつていて、それは筆の先で清正の髪を細く描きながら、疲れた肩を左手で探んだり、墨の染みを下唇を噛んで、細長い布を見上げ見下している。一筆ごとに螺旋^{スパイラル}して黎の髪を浮き上るのを見るにつけて、もつと奇麗な絵具が欲しくてならぬ。あの草摺もその髪も、ほかの色で彩つてみたい。いつぞや大徳寺で中平のあつた時、仏様の絵を二三幅見せてもらったが、どれも懐かしい絵具を用いてあって、見ていて何といふことなしにいい気持がして、その前を離れなくなつた。あんな絵具は何で描くるのか書いたらんが、自分も一年で一度でも、立派な絵具で絵地へ書いてみたい。

彼の左右には墨を浴かした飯茶碗と、小さく朱硯と藍を両縁に塗つた小皿があるばかり。筆も小学校の手習用の一本二錢か三錢の毛が擦り切れるま

「一三年前から自墨をつけてた舟竹と、陸に言葉を交わすようになったのは去年の秋。忘れもしない、彼女が薪下の川で洗濯をしていた。遙かだ水がちよろちよろと草の中から流れてくる。舟竹は結びの手拭を舟橋板にし、幅の広い滑らかな石の上に少し屈んで立ち、足の甲まで水に没し、両足で調子よく汚れ物を踏んでいた。周囲に人の声もしない。たどたど寺の屋根に鳴いているばかり。その時ここで絵に書きたいと思った。その姿もその顔も、この村にや出べる女はありやしない。それで「私の女房になるか」と言うと、首を横に振らなかつた。あんな別嬪が私の女房になるんだぞ。村の小若達の集会に行くと、吉の野郎は二十歳になつて、まだ街妻一人よう挙えぬ、意氣地なしめといつて、皆んなして冷かしやがるが、どうだ豪邁しかろう。

彼はうつとり書きこみ、やがてまたにやりと薄氣味悪く突つて筆を執つた。で、ようやく書き終つたころ、茶釜がジンジン音を立てる。

「吉、お茶が沸いたでえ」と、婆さんは棚から膳と鍋を卸してくる。

「お母、初野はまだ辰らんかな」と、吉松は痺れた足を瓣で撫で膳の前へ坐つた。米一分の黒々とした麦飯を茶碗に盛りにし、茶柄杓で茶を打かける。

「笑うてすまうもんか、が山くじらものを食べさん
すりや、次、言うことあなどでないか」

「お母はどうても、私やつらいがな」

婆さんは吉松の隣れっぽい小言を聞きながら、饅頭を食事を終ると、汚れた茶碗や小皿を隅の方へ押しのけ、坐つたまま田の側へにじり寄り、口の内で唾そくな引臼噴き唄い、また髪を磨りだした。

吉松は布の軒の下を待ちて、それを白木編の大風呂敷にくるんで外へ出た。空には白い雲が漂い、柔しい風が冲から吹いてくる。海辺近く太い松に囲まれた住吉神社では太鼓の音がして、小供の聲が騒ぐ声がする。この前ではお詫びした時は、神社の扉は鎖され、埃の積んだ隙間に子守が二三人腰掛けてるばかり、境内は寂寥としているが、今日はばかに騒ぎだ。今夜宿前で太漁舟の集会があるそなうだが、宿を中心にして、通る路どこを見て、吉松も生々した空氣に胸の鼓動し、記なく悦しくなつて、大急ぎに歩きだした。

一一

彼は小学校も一年で止めた。絵画の教育などさらには受けたことがない。しかしこの間にが独りで工夫して書きだした。少し時から筆切れで地上に描いたり、消墨

物は皆彼の筆を煩わすのである。

彼は依頼者にかの布絵を渡して、五六十歳のおれを貰い、それから漬伝に一二三新米納着を訪ねたが、い予れも氣持よく払つてくれる。「吉マサヤ毎巻絵が上手になるぜ」「今歲の清正は、どうで、元気がええ、厄満神も逃げてしまつ」と、行く先々で聲を立てる。吉松は袂の中に鐵の音をさせ、大得意で心はせしても、わざとゆっくり歩いて、お竹を捲しに行きかけた。日は山の端近くなり、潮も退きかけ、半ば海へ突出た駄菓子屋の支柱は、濡れそのまま根元を露わしている。店前には多数の漁夫が陣取り、栗かごいや大根餅やら、てんてこで油で食い、大声で笑つたり叫んだりしてゐる。彼らの話題に上るものは、たいへんは喧嘩か女、あるいは隣境。しかもあたりかまわず露骨な言葉で持ちきりだ。さまでま波波の親切老い女でも通れば、戯けた口を利いて、大勢でどつと隣したてるは愚か、悪くすると道邪魔をして罪なからかにを始めることもある。また中にはからかわれたがつて、自分で押かけ、ぐらりと身を離してやうとういう女もある。漁夫の休日にはこの駄菓子屋が集落部になつて、時には隣舍も兼ねるのだ。

吉松は何気なくこの店先を通りかぶり、「どうがつてみると、萬葉の悪い奴らが描つてゐる牙齒の圖もある、備前徳利の米もある。タニの虎、横首の鶴、村を議がす連中が皆久しへりで帰つてゐる。懸い所へ来合わせな。あれらに掛け合つちやくくなことはない」と、知らん顔で行過ぎようとする、龜が素早く見つけて「吉公じやないか、まあおれいよ」と呼留めた。吉松はしかなしに振り向いて、「今日用が残つてから遊びにやられん」と、ちょうどお世辞美をして行こうとしたが、「まあそないに言わすに荷れと言ふら荷れいよ」と言つとこもに、龜は舐めて、両手を開いて道を防いだ。

「そうら逃げるなら逃げてみい、鳴門の海を漕きつた航じや」

吉松は隣に捲まつた小雀、争うもむだだから、そのままで小さくなつて店へ引摺りこまれた。袂の銀貨がジララジラ音を立てて。

「おもたんと錢を持つてつけな」と、龜は吉松の袂を握つて重味を量り、牙齒を劍ひだして笑う。

「汝に聞くことがあるから、まあ坐れい」と、年長の虎は後通りして席を空けて、吉松を坐らせ、「吉公はいつ

85 五月 館

で板に描いたりした。草紙へもろくに手習いはせず、虎や人形を書いていた。十三歳の初夏、大酒呑の父が、表刈最中に発狂してから、誰方なく自分も日雇職をしました。一家の生活を助けたが、チビ松と隣名をつけられるらず、一日腰を持つと脚筋が挫けるようであつた。とにかく体が小さくて弱いため、人の仕事はできず、一日腰を持つと脚筋が挫けるようであつた。とにかく腰がさしたように自分の死後を思つて、黙つていろると、米は鼻に觸をさせてヒヒヒヒと笑つて、「思業教書を何をしとる、術藝の事でも考えどるか、おお竹と夫婦約束をしらうじやないか」。

「そうじやうじや、誰れやらがそんな事をしどつた」「汝がながなが馬鹿をするのう、ねのがちうと瀧に出て村におらん間に、こつそり女子を折るため、汝もえらいそ、祝いに酒でも奢らんか、その袂の錢だ」と、皆さんでおもしろううにいろいろなことを言つて、冷かしては笑い、笑つては冷かす。吉松は知らず袂を握り替へ、「虚言じや虚言じや、そがいなことがあるもんか」と、狼狽てて言つて、顔を少し赤くした。

「麗さんでもええわ、じやけど汝もお竹だけは諒らぬい、あの女子はな、ちやんと主が定つところじやぞ」と、虎は手脛を出して胡麻を搔き、すまじそ顔で煙草を吸つて、「おお竹を呼びだす計画なんか頭の中から消えてしまい、ただ瀧の瀧ばかり目に浮ぶ。なぜ源の船が土佐沖で沈没しなかつたのだろう。なぜ鳴門の瀧に揚きこまれなかつたのだろう。なぜ私を吐つてくれた人のせいに、駄菓子屋の作戦篇が早く死んで、源のような奴は虎烈刺にも躊躇らぬのだろう」。

吉松は神社の方へ向つて石ころ道を辿つた。道の左右には貝殻の殻がところどころに撒かれ、深紅の柘榴の花が白壁の側に咲いてる。彼が夢心地でそれを見ていたが、太鼓の音や鈴の音がますます耳やかに聞える。小供らは祭ででもあるように、群をなして玉垣の前を飛んだり跳ねたりしてゐる。

「足よ」と、突然に声がした。

驚いて見ると、初野は真向に立つてキヨロキヨロしている。塗られた白衣を赤い振袖で締め、埃に染める白茶けた髪を顎で茶先のように結び、顔から首へかけて振

見てても自瓜のような顎しげる、じこふ工合が悪いやんか、大事にせえよ、汝が娘らうど、家の者あ乞食せねや餓え死にじや」と柔しく言つたが、吉松は厭な気がした。自分が死ねば母と妹とは食をすることは分つてゐる。それに母は乞食を取とするような人じやないで、彼は愚がさしたように自分の死後を思つて、黙つていろると、米は鼻に觸をさせてヒヒヒヒと笑つて、「思業教書を何をしとる、術藝の事でも考えどるか、おお竹と夫婦約束をしらうじやないか」。

「そうじやうじや、誰れやらがそんな事をしどつた」「汝がながなが馬鹿をするのう、ねのがちうと瀧に出て村におらん間に、こつそり女子を折るため、汝もえらいそ、祝いに酒でも奢らんか、その袂の錢だ」と、皆さんでおもしろううにいろいろなことを言つて、冷

かしては笑い、笑つては冷かす。吉松は知らず袂を握り替へ、「虚言じや虚言じや、そがいなことがあるもんか」と、狼狽てて言つて、顔を少し赤くした。

「麗さんでもええわ、じやけど汝もお竹だけは諒らぬい、あの女子はな、ちやんと主が定つところじやぞ」と、虎は手脛を出して胡麻を搔き、すまじそ顔で煙草を吸つて、「おお竹を呼びだす計画なんか頭の中から消えてしまい、ただ瀧の瀧ばかり目に浮ぶ。なぜ源の船が土佐沖で沈没しなかつたのだろう。なぜ鳴門の瀧に揚きこまれなかつたのだろう。なぜ私を吐つてくれた人のせいに、駄菓子屋の作戦篇が早く死んで、源のような奴は虎烈刺にも躊躇らぬのだろう」。

吉松は隣に捲まつた小雀、争うもむだだから、そのまままで小さくなつて店へ引摺りこまれた。袂の銀貨がジララジラ音を立てて。

「おもたんと錢を持つてつけな」と、龜は吉松の袂を握つて重味を量り、牙齒を劍ひだして笑う。

「汝に聞くことがあるから、まあ坐れい」と、年長の虎は後通りして席を空けて、吉松を坐らせ、「吉公はいつ

吉松は一座を見廻して、最後に目を丸くして、虎の顔を見詰めた。

「お竹にやちやんと主がある」と、虎は繰返して、「汝やまだ知るまいが、彼女は源兄のものに走つどるやじや、源兄が去年土佐へ行く時、お竹は己が妹にする、五月の節句に帰るまで、彼女に手でも触つてみい、承知せんそど、私らに言ひつけんじや、汝も氣をつけい、うつかりしてお竹の體氣でもねかすと源兄に言つ王あ捨じ切られるぞ」

その様子がまんざら戯言でもなさそうなので、吉松は眞情になつて震えた。頭を奇麗に刈りこんだ新客が入ってきて、漁の話をしきれ、虎の仲間はもはや吉松を相手にしなくなつた。彼はいつの間にか大の字に實て歎をかいている。

吉松はこそそと外へ出た。もう一月も手入れをせぬ髪は小さい耳朵を敵に隠くし、細かい縫縫の革本は華やかな夕陽に照りつけられ、縫具の名残が黒く青く光つてゐる。虎の威嚇文句がまだ耳元で鳴つてゐるやうで、彼れの聲はくらべて身に添わぬ。源といふ姓は駐在所の巡査も恐れて手出しをせねほどの暴れ者。腕力が強くて三人前の仕事もする代り、獣に触ると、出刃庖丁を振り廻すのが評判の獣だ。十五六で魚売りをしている時分か

6

で塗られている。

「兄がお前時さんになわなかだ」と、なお前後を見廻す。

「会うもんか、汝ももう家へ戻れ、お母が柏餅を捲らえて待つどるから」と、吉松が手を振ると、

「柏餅か」と言つて笑つたが、また身をもがいて手を振放し、

「えひでも、時さん私を捲しじる。皆なが言うから、あの人に会わにやならんもの」と呟いて、鳥居の前をウロウロしている。以前から玉垣に音りかかり初野をからかつて書んでた連中は、こちらを見て、「初野さん初野さん、時さんはお越様へ行つた」と聲じたてて、どつと笑つた。

「ほんまにお越様へ行つたのかな」と、勢のない声で言つて、初野は西の方へラララ歩いて行く。

吉松は情をくなつて涙を浮べた。この瞬間恐ろしい事が、たゞ白痴の妹が年じゅう村の子供の玩具になるのを恥しく思った。そして翛然と帰ると、母は唇を出したまま、板の間に眠つていて、頭の側には一つ二つの蚊が幽かな音を立てて飛んでゐる。

7

三

85 五月 館

吉松は酒も飲まぬ。唄も唄まぬ。遼夫仲間とは性が合ひながら、平生仲のよい友だちは少い。今夜の集合にも驚いて来る者もなく、またとても行く気にはなれぬ。で、早く晩食をすませ、神棚の灯明皿に灯火をつけ、上り框に腰を掛けたが、今夜から船の仕事もなくなつた。平生なら夜業に草鞋を造るのだが、今夜は肩が痛し気分は悪く、今夜は元氣は元氣だが、何ともいふが、今夜から船の仕事もなくなつた。平生なら舟を持ててもうでもない。妻さんは舟を出すが、今夜は舟を出さず、船の光で水を流していく。数町を離れてお宮では太鼓の音がますます賑やかに聞える。

「吉よ、汝や鏡をどこへ置いたか」と、母に問われて、吉松は振返り、

「そこの戸棚に入つたらあ」と言って、薄光りに縮毛糸のブルブル震うのを見ている。
「何を置つたか」
「今日は三田ばかし積ってきた、まだ三軒残つたらあ」
「それがいくつあればいい、そんじやえと節句ができるなら、お母も明日はお姫嫁の吉くわが福に頼まれどるとかねら、また鏡になるし、妻の一歳や二歳は庭へ積めるわい、汝も娘を娶るなら今がちょうどええ機会じゃ、誰れでも好きな女子がありや連れてこい」

吉松は今宵は住み馴れた家を、堅立って暗く感じた。室内に這ひ上つて行灯をつけ、灯心をかきたてたが、隅々はなお暗い。天気が至ったのか裏風が吹きだし、ソヨソヨと裏口から入つてくる。樹杞の木を騒ぎだした。お宮の大鼓の音は止んだが、ワイワイ叫ぶ声はいつもそら盛んに聞える。彼女は耳を傾けていたが、やがて不意に起上つて、声する方へ向つた。三日月はすでに沈んで、天遙く星が力弱く光つてゐる。

彼女は小暗き道を進つて、玉垣の側になんだ。鳥居の根元は出入の提灯に照らされ、松葉に被われた敷石が明るくなり暗くなつていて。松葉の聲が遠くなり近くなる。神社の扉は仄く開いて、神前には大きな燭台の光が耀き、左右には數十の漁夫が眉並び、中には片肌を脱いでいる者、胸毛を剥わしてゐる者。怒鳴つては舌を噛んでは怒鳴り、言葉の筋も分らず、たゞ騒がしい音が一つになつて、酒の香とともに神の澤内に張つてゐる。神社の周囲には小児が群がり戯れてゐる。常の夜は運の音と松風ばかり、三三つには町の女の白装束で蠟燭を頭に戴き、呪文を讀して松の幹に、胸の恨みを籠めて五寸剣を打つと、母から禰いていけるが、その淋しい満地は一村の衝渠の巷となつてゐる。

吉松はその声を聞きその音を嗅き、熊のごとき脳をま

「私や娘を娶らんでもええ。一生独りで暮すじや」
「そりでも、今朝は娘を娶りたいと言うたじやないが、考へる鶴でも梅でも皆んな娘があるんじやもの、汝も欲しきらうがな」

婆さんの声は欠伸まどりで、しだいに糸車も闇がちになる。吉松は時おり話しかけられてもうろくな答へぬ。
「しばらく母子背合せで黙つていろ」といつの間に初野は勝手口からノロノロ入ってきた。自張の舟や、陽気に廣く方ではなく、口数は少く、戸外へ出るにも遅るにも、たゞいは忍び足で、家の者にも気づかぬくらいだ。両方の袖口を持って、じよんせり庭に突立つたまま左右を見廻し、

⑨「お母、家は暗いなあ、兄よ、お宮は賑やかじや」と、低い声で言って、草履を引摺つてまた戸外へ出かけた。

「初は朝から御飯も食へて、何をしこるんのう、もうどこへも行かないで、早うお夕飯を食へなよ」と、婆さんは擦擦声で言つたが、初野は「それでも家は淋じるもの」と、どこへか行つてしまつた。
「また皆んなに聽られたいんか」と、婆さんは独言のように言つたが、ものは娘を気にも掛けず、糸車を離らせね。

88

8

もいる。嘘ううう。しかしにうなずいているのは源らしい。と思うと、吉松は恋想の消えてきゅうに怖気がつき、玉垣の蔭に小さくなつた。そして彼らが鳥居を潜るのを待ち、静かに帰りかけた。

星は残りなく隠れた。沖にはつねに見る漁火の一つもなく、舟原も聞えず、暗い波は黒い雲と接して、ただ風にもまれた満沢の音が高い。

⑩「兄よ、沖にや海坊主がいるんじやなあ」と初野は闇の中から声を掛けた。吉松は黙つて妹の手を執つて家へ帰つた。母の影は障子に薄く映つてゐる。糸車の音も聞える。

がら下へた小娘が牆を蹴りながら通つた。どれもどれも見馴れた顔だ。

彼は目では戸外を見ながら、心では昨日の出来事を現思ひ浮べた。他鄉を知らず書も読みぬ彼には、夢にも現にも一村の事件がすべての智識であり想像であるのが、今日も彼の貧れな智識の巻を繰り広げてみたが、その全世界には源もいる、龜もいる。彼らは絵本で見な綱や金時のような腕を持つて、一村に跋扈していながら、彼らが生ける限りこの村は太平ではない。私のような薄腕で叶らぬ。

彼はまたお竹のことを思い出した。その機縫姿や田植姿が印象的強烈にありありと浮び、かねてのひそひそ話を、今聞くごとく感ぜられたが、ふと源の事に思い及ぶと、楽しい夢は一時に消えてしまひ、はたしてお竹が源を思つてゐるのか、虎の告白が真であるか戯言であるか、静かに考へる眼がない。ただお竹を盯めたとして源が拳を握つてお茶を見て、自然に目を瞑つた。

雨はきゅうに強くなり、戸外はいつそう暗くなつた、板の間に翼屋根から雪が垂れる。隣りの牛が大儀そらに吼える。知らぬ間にお竹が経の前垂れを頭に戴いて軒下に立つてゐた。

「吉さん、傘を貸しておくれんか

四

翌日は雨。風も少し加わつた。婆さんは糸を掛け、お高齋の家へ生靈退治に出かけた。初野は相餅を腹につけ、ぱい詰めこみ、津塵の糸を糸で纏つて弄んでいたが、やがて厭いのか、傘も差さず、雨を犯して当度なく出て行つた。吉松はただ躊躇になつて戸外を眺める。ひしい霜の木汲女が昨日と同じく、跡切れ跡切れに通つている。醉つて銅鑼聲で唄つて通る者も多し。竹の皮縫緝の足跡を引すり徳利を掛けた小供が脩首にて鏡を読み通つた。番傘を掛け、萌葱の重箱包を柄の先に

9

吉松は幻影でも現われたようにギョとして、目を丸くした。
「私んとこに傘があるもんか」と、わざと横を向いた。
「家にや誰れもおらんかな」

「かん」と、微かに言つたのみで、吉松は津塵に漬をすり付けて、
「吉さん」先日の話はどうするもんか、考え方をおんのかな」と、お竹は小声で言う。吉松は黙つてゐる。
「ちつとは小降になつた」と、お竹は空を仰いで「あなた、吉さん、お節句がすんだら舟が出来るから来ておくれな」と甘えて言つて、前垂を被つたまま房端折つて駆けだした。

吉松は頭を持上げて、夢見たようにその後を見送り、姿が見えなくなるとまた寝そべつた。なぜもつと話さなかつたから、間わなかつたから後悔した。「舟が出来たら金よう」節句がすめばお竹の父も沖へ出て、彼女の身も限になる。源も船も海へ行く。そうなればお竹の心も離められる。思ふと一縷の希望が浮はねでもない。明日明後日も同じこと、と彼女は指を折つて、「八日には腕の強い血を恐れん奴は、島の向う波の荒い沖へ出でてしま」と、にやりと笑つた。

しかし小供の床から胸に引みこんだ不安心は、今も消失せず、ちよちよろ舌を出す。彼女には村が死んでゐる。五箇盆とか氏神祭とか、四季おりおりの祭りには、きっと下駄が飛び船が飛び、血塗れ騒ぎの起るに定つたこの時代を村が想い。何だって皆んなが仲よくおもしろく喜さんのだらう。せめて命知らずの源が死んだなら、この村も少しあはれが分かるかも知れない。喧嘩の数も少くならない。船や米も源に喰かされてつけ元氣で暴れ廻るんだから、親分の源がいなければ、あんなにむり非道な人困らせをせんに極つてゐる。

「村のため自身のため、源が死んだら源が死んだら」と、二十分も三十分もそれはかりを考えた。
驟雨模様のドシヤ降りが漸ると、密雲が薄らいで戸外はやや明るくなつた。初野の弄んでいた津塵は泡を吹きながら、吉松の頭の側へ這つてきた。彼女はふと思つたて、糸を手繕つて、壁を柱に縛りつけ、塵紙に厚生を始めた。蟹は飛びでた目に怒を含んでがきだす。紙にものものがいる様が生々と現われた。興が盛つて五枚大枚書き続けたが、やがて惜氣もなく鼻をかんで、丸めて裏面は、糸を飛んでコロコロと鳴いてた蟻は、瓣と思つたのか、反面紙をつゝきだした。庭に石ころ道を踏みさして、白装束の母と赤い顔した妹しが帰つ

91 五月 嵐

10

91 五月 嵐

てくる。

「ほんまにはんまに源の死をこなす真^までやがれ」と、母は怒鳴って、初野を家へ引上げた。初野は汗ややり立つていたが、顎が目につくと、柱から離して居間にゆう引きます。

「おのれくそ、源の黙道」「頭当りも」と、喧^ごい声が響きわたる。吉松は呆気に取られて、母の顔を見上げ、「お母、どうしたんのう」

「どうしたも何もあるもんか、汝^汝まあ聞いてくれ」と、お姫^姫のことが奥戸に、米公の前を通り、初野が眞^まが腹をして襟になつどるじやないか、何をしてるんかと思うて入つてみると、汝^汝源や鶴が大^お床^ゆかいて酒を食らうといやがつてゐる、初野で舞^は無体に酒を呑ませて踊らせじろんじやでな、そりを見て、私や腹が立つて腹が立つて、飛びこいで叱りつけてやると、汝^汝なおのこと曾^もながふさげだしやがる。しまいにや私の持つてある、鈴^鈴を出して、塵^{ちぢみ}をばか觸りを初めやがる。大事な鈴^鈴が汚れちや、私の命を取られたも同じでないか、今に見と口惜^惜源を離^{はな}だ。吉松は心では怖気がついたが、それでも母を慰めるつもりで、「がいに怒らひでも、私が仇^{むし}を取つてあけらあ」と言

端座して、一家安穏^{やすら}四海泰平の願を齋めた。初野は事に泣^な音を立てて「兄よ、来てくや、恐いがな、恐いがな」と叫んだ、口から涙を垂れている。

吉松は自分が妹一人疎^疎することもできぬ不^ふ甲斐^{めい}なさを思つた。親子三人が雨風に曝され、乞食^{きしょく}になって流浪する機が思われた。

でも、考えてるうちにいつとなく妹の傍^{そば}もぐりこみ、木枕をして眠入った。断^{だん}を断^{だん}に苦しい夢に纏われたが、ふと大留で拾つた鏽びた瓦鉗を持って、宮の松の樹に源を呪^のつては打ち曳^ひつては打ちしていると、愕然と目が醒^さめた。妹が彼の肚^{はら}を蹴^けつていて。灯明は消えかかつていて。

三つは今時分だろう、宮へ詣つて源を呪^のい殺した。彼が死ぬりや一村の災が除けると思^いこんだあげく、自分で自分が遙^とろしくなつて、瀬^せ田^たの中へ首を引っこめた。

翌日は五月五日。雨は名残^{なじみ}なく晴れ、夕^ゆえを光は一村を包んでいる。吉松は屋敷の御馳走にと馬貢^{まきざな}に出た。道の左右の豪^ご富^と、家々の門には五月幟^{さつき}が勇ましく翻^{ほん}つていて。小兒^{こわら}は諸方の戯^ぎ具^ぐ物^{もの}に廻つていて。吉松は何となく得意になつて空^{そら}を見上げていて、源が籠

つたが、母は気がむしゃくしゃして、つねになく邪^{じや}に、「汝^汝口はつかりて、源の脇に叶^{かな}うもんか、汝^汝が弱虫^{よわむし}じから、初野まで皆^{みな}にじめられるんじやがな」そう言いなさんな、私も單^{たん}單^{たん}單^{たん}じやもの」と、吉松は不^ふ快な顔をした。母は鎧を脱^ぬぎては血相を變^かえている。

92

12

五

晩餐が終ると、母は糸車^{いとぐるま}手を掛けたが、もう気が落ちついたらしく、懐食^{かいじき}を口も利かなくなり、顔色も平生のおり眼むそうだ。雨がまだ止まぬので早く戸締をし

て、初野は首の口から寝室^{しゆしつ}へ入つた。遠^{とほ}方から幽^{ゆう}かな声が風につれて吹きこむのみで、今夜は昨^よ夕と異つて静かだ。「吉^{よし}、もう寝^ねます、お母^{おはな}も寝^ねるから」

吉^{よし}は村長の宅へ絵本でも見せてもらいに行こうかと

思^{おも}い、門口まで出た。見る限り果てのない暗黒世界、後

も山も宮の松も闇に没して、天にも地にも豆粒^{とうり}ほどの光

がま^まで、さき^{さき}うに恐ろしくなつて家中^{じゆう}へ駆けこん

だ。燐^るがぶつ^つつ^つ金出^{かなで}神社^{じんじゃ}のあれの前に、灯^{とう}火^ひは丁子^{とうし}を結

んでいる。彼^{かれ}は灯明^{とうめい}をかきたてて油を注^{そそ}ぎ、その前に

13

を提げて近づき、「吉^{よし}公^{きみ}、汝^汝も壯士^{さうし}か、久^くしよりじやのう」と笑顔をして、沙魚^{さぎ}をたんじ賣^うつたから、汝^汝に分け^{わけ}てやろう。さあその鏃^{くわ}をこつちへ出せ」吉^{よし}は返^か辭^{ことわり}もせず^{もせす}に構立^{こうりつ}になつて、涼^{すず}い塩風^{しおかぜ}が顔を振^ふわる。

93 五月 風